

---

# ~誓い~

巖櫻 祿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～誓い～

### 【ZPDF】

Z5504D

### 【作者名】

巖櫻 祿

### 【あらすじ】

魔法使いレファと日雇い剣士ルーツ、ハンスのドタバタ冒険コメディ。秘宝『カマラ』を取りに行く3人。そして壮絶なドラゴンとの戦い。ちょっとラブコメなファンタジー。

冒険者の街、ガルディア。

大通りから一本入った路地にある酒場から怒鳴り声が聞こえてくる。

「ばつかやろーー。」れだから困るぜ、お嬢様はよー。」

「なによー何にも解つてないくせにー。」

「ちょ、ちょっと・・・2人ともさ、ね、ケンカやめよつよ。あみつよ。」

この手の酒場で日常的に行われているような言い争い。

もちろんそれが刃傷沙汰になる場合もあつたりする・・・

周りにいる客は全く聞こえないかのよつなそぶり。

店の店員もしかり・・・

「ね、ルーツの言いたいことも解るけどさ、今はレフアに雇われてるんだからレフアの言うこと聞かなくつちや。」

大きな斧を腰に下げている大男がその風貌に似合わないほどおろおろしながら隣に座っている男を説得している。

「あんだ、こら、ハンス？貴様どっちの味方なんだ？」

「そ、そ、そなんあ・・・どっちつて・・・」

ハンスと呼ばれたその大男はルーツとレフアの両方の顔を見ながら困っていた。

「あなたも男ならはつきりしなさいよーもうー」

「い、ごめんよお。そんなに怒らないでくれよ。ね、レフア。」

「大体ねえ、あなた達それでも用心棒？ただのお使いじやないんだ

から…

レファと呼ばれた女性・・・おやりく魔法使いだろ？。衣装が職業を物語つている。

その、レファは腰に手を当てて「王立けになりながら腰まである金髪を振り乱して激怒していた。

「お使いたあ、ずいぶんじやねえか？」ひちは契約分のお仕事はちやーんとこなしてゐるぜ？」

と、ルーツも切り返す。

腰に細身ではあるが明らかに手入れのされていいる剣を差し、メタル系の鈍く光つた防具を身につけている。

ブロンドの髪に切れ長の目。

顔は整つていてるがその口から発せられる言葉はお世辞にも綺麗とは言い難い。

「大体俺達に買い物頼むか、普通？それで買つてくるモンが違うとか言つんじやねえよ。お門違いも良いとこだ。」

「なによ！ただただ毎日ぼーっとしててお金取つていくならそれくらいいことはしなさいよね！」

「んだあ？じやあ、もつとまともな仕事をせりよー。冒険に行くでもねえのに用心棒なんて雇うんじやねえ！」

「だからちよつと待つてついていってるでしょ？あと1日2日待てないの？このせつかち！」

「だったらお手伝いのおばさんでも雇うんだなー。そんなとこまで面倒見てらんねえやー！」

「・・・くわー・・・・」

「うちはプロなんだぜ？プロは戦いの中に身を置いてなきゃ 鑄び付こひまうんだ。」

「……わ、わかったわよ。じゃあ、明日の朝出発しましょ。それなら文句無いでしょ？」

「ああ、ぜんつぜん構わ

ああ、せん、せん構ねえ。そ、ちの準備が整、てりやな。

「あ、あ、明日なのね・・・」

「んだよ、テカイ団体のぐせしてこぞり玉砕となつたら意氣地ねえな

あおまえは。」

「だ、だつて、イムカリ山行くんでしょお・・・・」

「あなたも用心棒なんだから！しつかり私を守つてよね！」

「おおえ、そのお嬢様に会つて、いただいた方が良へんじゃねえか

「...」

「いやよ!」みんなの声が聞こえた。

卷之三

、新井一郎の「新井一郎」。

ノアの箱の秘密

「大体あのお嬢は口の利き方をしらねえ。たまらんぜ、あんなのに

。せひさておちま

「でもさ、ほら、最初ルーツも言つてたじやない。ああいうか

わいい雇い主も良いかなつて。  
「

「見た目と中身は別つて」つた。あんなのなら願い下げだ。

「・・・  
ね、  
明日  
・・・  
」

「あん？」

「別bay、イジカレヨ、アゲ。

「ああ、女ジバーバーの事

たててほんに何たうけ何とかうてせうすぐ上方にある

んでしょ？」

「ああ、秘宝『カマラ』。山の中腹にある洞窟の奥の方だ。大丈夫だつて、お前はいつものようにしてりやいいんだから。」

「だめだよお。考えただけで膝がガクガク震えちゃうモン……」「けつ、言つてろ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まだ夜も明けきらない早朝。

朝靄の中の草原を歩いていく3人。

「何かあつても絶対私は守つてよね。」

先頭を歩いていたレフアが後ろ向きに歩きながら2人に念を押す。

「ああ、守つたる。安心しな。」

鞘に収まつた長身の剣を無造作に肩に担ぎ、自らの腕の重さを剣に委ねたままルーツが答える。

「そんなんで安心できるわけ無いじゃない。」

「あ、ね、レフア。ルーツは一度やるつて言つたらやる人だよ。大丈夫。」

ルーツの後ろを歩いていたハンスがルーツの頭越しにレフアに答える。

「ホンツトに守つてよー。」

「ああ、俺の剣に誓つても守つてやるだ。」

自信に満ちた目線を送りながらルーツが答えた。

その田線に疑いの田線を返しながらレフアが立ち止まる。

その言葉、忘れないでよね。

忘ねぬよ

それは今回は「カイ」を取ってぐるのか目的だからね

25

これ以上の争いが無意味になると悟つたレファが向き直り、歩き出した。

「ちゃんと付けてよー。」「はいはー。」

イムカリ山中腹。草も生えない黒と白の世界。  
深い霧に閉ざされ、やもすると今進んで来た方向さえ解らなくなり  
そうだった。

端のすり切れた羊皮紙を覗きながら歩いてきた3人。

先頭のレフアが歩数を数えながら歩いている。

42, 43, 44, 45

「なあ、ほんとここにひで合ひてゐるのか?」

「…48、49、50、51…」

「だんだん不気味になつてきたね…いたいっ…いつたいなあ、木の枝が顔に当たつたよ~。」

「…57、58、59、60…」

「腹減つたな~。そろそろ休憩しねえか?」

「65、66、67、68… ちょっとあんたたちねえ! 少しは静かにしてられないの?…!」

「そんなこと言つたつてよお。こんな山の中で迷子になつちゃかなわないしなあ。」

「だつたら余計に静かにしてつ…!」

「ねえ、レフア。僕たちのことは気にしなくて良いからね?…道に迷わないよつこ…」

「気にしないでこられるわけないでしょつ! 後ろでぶつぶつ話されたら気が散つちゃうじやないつ…つて、あれ? ロロ何歩だった?」

「…まあ?」

首をかしげる2人。

「あんたたちつて、ホンシト、最低ね。まつたく。もう一回あの辻まで戻るわよ。あそこから80歩のところに入り口があるはずなの。ちゃんと数えてよね!」

「へ~い

「はい」

「… 79、80、つと…

「… 79、80、つと…」

「これが。」

「うん。入るよ…」

「な、何が出てくるのかな?」

「かわいい奴がいっぽこ。」

「つな訳ないでしょ。こくよ、もあ。」

洞窟にはこじるに適つた臭いと仄下のぬのとした感覺だけ。自分の手も見えないほどの暗闇。

「うわあ。」

「ね、ランプ出して。」

「んあ？ そんなモンもつてねえよ。」

「えええ～。あんたたち、何しにあたのよ。」

「わっわっ！」

「どうしたあつー。」

シャキンッ と剣を抜く音。

「蜘蛛の巣が顔にくつこいたよお～。」

「…つったく。死ぬまでやつてろ……」

「ねね、ちょっと、どこでもいかないでよお。」

「で、この真っ暗な中でどうする？」

「ちょっとまって。今魔法で明るくするから。」

「おう、そうしてくれ。つつーか、そんな事できるなら『ランプ』

とか言つんじゃねえよ。」

「つるわこわねえ。こぎつて時のために魔力を残しておきたーのー。」

「くニくニ、どーでもいいからつたと明るくしてくれ。」

「…」.txt Fileame-」

「あれ？ 呪文間違えたかな？」

・・・何も起きない。

「おいや！」

גְּרָאֵם-לְבָנָה וְעֵמֶק-עַמְּלָה

# Lighting Flame!

その瞬間、洞窟の天井が白く光り始める。

「おお、ありがとうございます。」

だんだんと光が一点に集まり明るさを増していく。

「どう? これだつて魔法学校の卒業試験じゃ13番田の成績だつたのよー。あなた達と違つて……」

とつてルーツを指した瞬間、天井がピカッと光り、激しい轟音とともに稻妻がルーツに向かって落ちる。

辺りはまだ暗闇へと戻るついでいた

「てめえ、思いつきり呪文間違えただろう?」

「…」めんなさ…」

「で？『洞窟を明るくする呪文』は解ったのかい？魔法使いの優等生サンよ。」

洞窟の表に一度出て、煤だらけの顔を拭ぐルーツ。

「うん、もう大丈夫。」

「つたく、アンタの魔力が大したことなかつたのと、オレが訓練積んでたおかげでこれだけで済んだけど。」

何も言えずに落ち込むレフア。

その視線の先にはこう記されていた。

かなり強力な雷属性の攻撃魔法。

熟練術者であれば攻撃対象、攻撃力を任意に制御することもできるかなり有用性の高い魔法。

ただし、低熟練の術者が使うと攻撃力のばらつきが大きく、ネズミ程度も排除できない程度から中型モンスターを確殺できるほどの攻撃力までばらつく。

運が悪ければルーツを帰らぬ人にしてしまったことに反省していた。

洞窟内に入る3人。

レフアが深呼吸をして呪文を唱える。

# Li ght Fa int!

洞窟全体の壁がほのかに明るくなつていいく。

「…ふう…」

「さて。じゃ、いきますか。」

ルーツ、レフア、ハンスの順番で歩き始める。レフアが地図を見ながら道案内をしひたひたと薄明るい洞窟を歩いていく。

「えつと、ここから40歩先を左に曲がると…つー…」

いきなり口を押さえられるレフア。

あわててその手を引きはがし、手の主であるルーツに猛抗議。

「ちよつとーいきなり何するのよー。」

言いかけて見上げたルーツの顔は今まで見たこともないような引き締まつた顔だつた。

切れ長の目に『静かにー』を意味する口に添えられた長くまつすぐな指。

レフアは自分の胸の鼓動が高まるのはルーツのせいじゃないと自分に言い聞かせた。

「ハンス、お姫様を頼んだぜ。」

何か言おうと訳の解らないジェスチャーをするハンス。どこからとも聞こえてくる足音。はつ、と地図を見るレフア。

「「ラッチにいけば遠回りだけど道が続いている。」

「じゃ、じゃあ、ぼくたちはそっちに…」

いそいそとレフアの背中を押して脇道に逃げるハンス。

ジグザグにできるだけ追つ手から逃げるよつこ奥へと逃げるハンスとレフア。

しばらく進むと横穴にある小さな部屋のよつなとこりにでた。

「「」に隠れてよつ。」

背中を押されて中にはいるとペタンと座り込むレフア。

「…ルーツ、大丈夫かな？」

「大丈夫。そんなにヤツじやないよ。」

「そつか…」

話すことがなく、ただじつと聞き耳を立てている2人。水のしたたり落ちる音だけが響いている…

しばらぐじつとじてこるとじこからともなく聞こえてくる足音。ヒタヒタヒタッ、とこう素足で歩いているよつな音。

「…何か…いる？」

「わ、わからんないよお~。」

「ちよ、ちよつと。びつあるのよ。」

「どうしよ…」

その瞬間、入り口からのぞく緑色のとがった鼻としわしわの顔。

目は血走り、口はだらしなく開いている。  
ゴブリンだ。

「何が出た…」

「ハ、ハンス！やつつけて…」

「え、ぼく？」

そんなやつとりをしていると入り口から鈍い音。

ズシュ…

何事かと入り口にいるソレをみると…

喉から剣の先が出ており、目は完全に白目をむいていた。  
その後からルーツの声。

「オトリになつてくれてありがとう。」

「ルーツ！」

「おう、無事だつたか。」

「よかつた無事だつたんだ。」

「アンタに心配されるほどひ弱じやねえ。」

「ね？ルーツは大丈夫だつていつたでしょ？」

「なによ！何もしてくれなかつたくせに！」

一気に肩の力が抜けた涙があふれてくる。

「バカッ…どうして私を…もう、置いてかないでよ？」

「守るために、あきらめる。」

「そんな、だつて、もう、こんな。」

入り口に立つて地図を見ているハンス。ルーツは剣を鞘にしまつとレファアの後ろに立つ。

「大丈夫だ。アンタは強ええ。また何か出たらサツキの魔法をぶち込んでやれ。」

「だめだよだつて……あれは……」

「あ？ あんなのオレには効かねえけど、ハハのヤツじやイチコロだぜ？」

「だめだよ、私の魔力じや……弱いし……」

そのとき、ハンスが声をかける。

「ルーツ。お宝はこの先にいけばありそつだよ。」

「そうか。じゃ、戴きに行つてくるか。」

「待つて、置いていかないで。」

「アンタはここで待つてろ。」

「いやつ！ 一緒にいて！ あんなのがまた出てきたら……」

「大丈夫。この辺りをウロウロしてたのは片付けた。最初に出くわしたオーガは逃がしちまつたけどな。」

ルーツは腰の剣を抜くとレファアと自分の間にその細身で鈍く光る刃をかざした。

「この剣に誓つてもお前を守るつて言つたら。そして、あれを取つてくる。それが誓いだ。」

「そんな・・・そんなの信じられないよ。」

「俺は女には嘘を吐くが、自分の剣には嘘は吐かねえ。」

「元でにやりと不敵な笑いを浮かべてハンスとルーツは出でいった。」

「そんな・・・そんなの・・・そんなの信じられないよ。」

レファは一人で居る寂しさに負けそうになりながら、涙をこらえてルーツ達の無事を祈っていた。

（　）

レファをかくまっている横穴からしばらく戻った横穴の入り口からルーツが中をうかがっていた。

「つたぐ、『カマラ』つてのが秘石だつて言われるのが良くわかるぜ。」

ハンスが通路の方を警戒しながらルーツに話しかける。

「巣にいるのは…子供？。親はいるの？」

振り返らずにルーツが答える。

「ああ、横にべつたりだ。」

「しばらくは『待ち』だね。」

「そういうつた。」

しばらく一人はそのまま身を潜めながら中にいる「親」の動向を観察していた。

「ちょーちょつとーだめだよー。」

突然ハンスが声を殺しながら通路の奥に向かって手を振り始めた。

その通路の奥には形相を変えながら走つてくるレファアがいた。

「そんなに騒いだら氣づかれちゃうよー」

「たつ、助けて！」

「ええ？」

レファアの後ろを見るとよだれを垂らしながら獲物を仕留めようと殺氣立つてゐるオーガが追つてきていた。  
とつさにルーツが剣を抜きながら振り向く。

「くつそお、付いてねえや。あんにやろ、回り道してレファアん所行つたな。」

息も絶え絶えに走つてきたレファアを後ろに匿いながらルーツとハンスが立ちはだかる。

前を見るとオーガは不気味な目を見開き、大口を開け、両手を広げていた。

身長は明らかにルーツの倍。

つまりハンスの1・5倍。

オーガはこぢらの隙をうかがつよつて等身離れて四つん這いになつた。

その目は明らかに血走つており殺氣立つてゐた。

「グゥウウウ・・・」

オーガが低く唸つた。

その瞬間、別の方向から低い声とかすかな地響き。

「ちつ、大将のお出ましだ。」

ルーツが後ろを見て舌打ちを打った。

素早く後ろに回り構えるルーツ。

レフアを挟んで2人が背中を合わせていた。

「ハンス、そいつを一撃で仕留めてくれ。」

レフアが不思議そうな顔でルーツとハンスを見る。

あんなに頼りなく、弱そうではつきりしなかったハンスに、あの才一ガを仕留める、だなんて。

しかも一撃で・・・

不思議に思いながらハンスの顔を見て驚いた。

今まで見たことのない、明らかに自信に満ちた顔。

味方についてくれてホントに良かつた、言い方を変えれば決して敵に回したくない。

そんな顔をしていた。

そして、ルーツが構えたその先、先ほど2人が中をうかがっていた穴から大きな陰が出てきた・・・

「う・・そ・・・」

レフアがうわずつた声を上げた。

「嘘じやねえ。あんたが欲しがつてた『カマラ』ってのはこいつの腹ン中にある石の事だ。あんたが大騒ぎしたおかげで気づかれちまつた。」

「そ、そんな・・・」

穴から出てきた巨大な陰。

冒険の経験が少なく、実物を見た事のないレフアでも知っている姿。

それは紛れもなくドラゴン。

この大陸で生存が確認されているモンスターの中でもっとも巨大で頂点に君臨する王者。

「ハンス、そつちをわざと近づけてくれ。」

「任せな。」

今まで聞いたことのないハンスの声だった。  
びしつと芯の通ったバリトン。

いつものふぬけなハンスの声ではなかつた。  
腰に下げている斧にすつと手が伸びた・・・  
と思った瞬間、それは回転しながらオーガの頭上まで飛んでいた。  
フツと息を吐くと同時にその巨漢に似つかわしくない素早さでジャ  
ンプし斧をキャッチ。

「ドゥオリヤア！」

ハンスの怒号が響いた瞬間、宙を舞つていた斧はオーガの頭をかち  
割り、鮮やかな緑色の体液が辺りに飛び散る。  
断末魔を上げる間もなく動かぬ個体と化したオーガから斧を抜き、  
向き直るハンス。

自分の子供を奪われると本能が察したドラゴンはうつすらと開けた  
口の間から黒光りした牙を覗かせながらこちらを威嚇していた。

「ルーツ、逃げよつよ。」

「こいつから逃げられるかよ？みんなで仲良くなつてお終  
いさ。」

「でも、あんなの・・・」

「殺らなきゃ殺られる。だつたら殺るだけさ。」

「だめだよ。みんな死んじゃう!」

「大丈夫。ルーツは一度やるつて言つたらやる人だ。」

ルーツの隣で斧を片手に仁王立ちになつて立っているハンスが顔を向けて話しかける。

「それじゃ、最高の舞台を特等席で見せてやらあ。ビビッて腰抜かすなよ。」

・・・・・

ドラゴンとの戦いは壮絶な戦いとなつた。一進一退の激戦。お互いにそれぞれ深手の傷を負いながらも決してひるんでいない。ルーツは額から派手に血を流し、目に入る血を剣を持った手で拭いながら一の腕を左手で支えていた。

ハンスは片足をかばいながら斧を片手に持ち、ふらつく体をもう片方の手で支えていた。

対するドラゴンは片目からは光を失い、片手は地面を向いたまま動こうとしていた。

この場で唯一無傷なのはレフア。

あまりの壮絶な戦いに息をするのも忘れて立ちすくんでいた。

「わい、そろそろクライマックスと行きますか。」

ルーツが気を取り直すように剣を構え直す。

ハンスもそれまでかばっていた足が何事もなかつたかのように体制を整える。

それを見たドラゴンも低いうなり声を上げながらゆっくりと一ひら

に向き直る。

「 もへ、もつこことよ、ルーツ。もつやめよいつよ・・・ 」

泣きそうな声でレフアが後ろから訴える。

「 へつ、ここで止めるわけにやいかねえだろ。何せ話の通じる相手  
じゃねえ。 」

「 でも、これ以上やつたら・・・ 」

「 どつちかがくたばるまで終わらねえ。もう止められねえよ。 」

「 ここまで来たら殺るしか無いよ。さ、危ないから後ろに・・・  
ハンス、お嬢様と一緒に下がつてろ。さつきの横穴まで。 」

「 ・・・ハンス・・・まさか・・・あれ、使つのかい? 」

「 へつ、ここで使わねえで何処で使つよ。ドライゴン殺つたとなじや  
あ、孫の代まで血漫できる。 」

「 ・・・解つた・・・ 」

「 なに? 何やるの? ダメだよー。 」

「 さあ、レフア。さつきの穴まで引き返そつ。ここはルーツに任せ  
て・・・ 」

「 ルーツー。 」

「 大丈夫だ。俺のことなら心配すんな。孫の代まで血漫したくても  
まだ子供もいねえんだ。絶対帰るぞ。 」

「 ね、ちよつとまつてー。 」

レフアが腰袋からつすらと緑色に光る玉を取り出す。  
それを天にかざすと共に短く、はつきりと唱えた。

「 Blessing from Heaven! 」

とたんに辺り一面が緑色の光に包まれる。

一瞬にして視界が縁から解放される。

すると、ルーツやハンスの体中の傷が癒され、体の芯が暖まっているのが解った。

「ありがとう。」

「そういや、あんた、魔法使いだつたな。」

「がんばって！」

「ああ、まかせな。」

うつすりと目に涙を溜め、ハンスに連れられてレファが奥へと退散した。

「さて、これであんたとタイマン張れるぜ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンスと先程の横穴まで退却。

ハンスは入り口の近くの壁に寄りかかりながら、目をつぶつて腕を組んでいる。

レファはハンスに背を向け奥の方で座り込んでいる。

ただ、ルーツの無事だけを祈つて。

「・・・・・ツトにあんた達つて馬鹿なんだから・・・。こんな事に命張る事無いのに・・・」

「・・・ルーツはこいつこいつ人だよ。やると言つたら絶対やるんだ。何があつてもね・・・」

「・・・馬鹿・・・」

しばらく沈黙が続いた。

ルーツがどうなつたかも解らない。

何の音も聞こえない。

ただ、レファの掛けた魔法によりほのかに洞窟全体が明るいだけ・・・

・・・

その瞬間、辺り一面が真っ白になり、洞窟が崩れんばかりの振動と共に、耳には聞こえないほどの大音響が鳴り響いた。

しばらくすると何事もなかつたかのように今までの静けさが戻ってきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「い、今のは・・・何?」

「ルーツさ。」

「え?・・・」

「さあ、行こう。」

「行こうつて・・・」

「もう安心だよ。」

ハンスはニヤツと笑つて、穴から出でていつてしまつた。  
レファもあわてて後を追つ。

「ねえ、何があつたの?」

「行けば解るよ。たぶん成功した。」

これ以上聞いても役に立つ答えは返ってこない。とにかく自分の目で確かめるほか無い。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ルーツとドラゴンが居たであらう辺り。

何か焦げているようなにおいが辺り一面に漂っている。

「ルーツ、何処に行っちゃったんだらう？」

心配そうに辺りを見回すレフア。

「たぶん」ひちだよ。」

ハンスはドラゴンの出でた穴を指さした。

ハンスと2人でその穴の入り口に入ったとたん、ルーツの姿があつた。

地面に仰向けになり、全身が煤で真つ黒くなり、あちこちに傷を負つていた。

「ルーツ！」

「大丈夫？」

「・・・・・・ん・・・・・あ・・・・・あ、何とか生きてる。」

「良かつた、心配したんだよーもうー！」

当たり散らすかのようにルーツの肩を拳で叩きながら、レフアの目からは涙があふれそうになっていた。

「おーおー、泣くなよ。だいじょうぶだつて。」

「・・・バカツ！」

ルーツが立ち上るとレファアが抱きついてきた。  
とにかくなんだか解らないが、ルーツが無事に生きていたことが何  
より嬉しかった。

「おいっ！ ちょっと待て！」

ルーツが抱きついてきたレファアを押しのける。  
腰に付けた革袋の中に手を入れ、中をまさぐる。

「お、無事だつたか。」

そう言って袋から出したのは、琥珀色の玉。  
卵より少し大きめで、その中心からは不思議な光が漏れていた。

「あ・・・カマラ・・・  
「お約束の品だぜ。」

煤で汚れた顔で不適な笑いを浮かべながら田の前にかざす。

「ありがとぅー！」

受け取るうと手を伸ばしたレファア。  
とつさに袋にしまつルーツ。

「まだダメだ。帰つたら渡してやる。成功報酬と引き替えだ。  
「えへ、チョットくらい見せてよ。」

「今見せただる。ああ、帰るぞ。」

「ケチ！」

「ケチで結構！」

「ドケチ！」

「ああ、俺はドケチだ。ドケチで大いに結構！」

「つんもう・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、約束の報酬。」

「それじゃ、これ。」

ルーツが腰袋から「カマラ」を取り出す。  
机の上の金貨の山の横に並べた。

「ね、一つ聞いてもイイ？」

「何だ？くだんねえ事聞いたら承知しねえぞ？」

「最後にドラゴンをやつたときのすごい音。あれ、何？」

「あん、あれか？サンダー・ボールつて知らねえか？」

「え、うん。知ってるよ。」

「そう、あれだ。」

「つて、あなた、サンダー・ボール持つてたの？！」

レファアの顔が驚きの表情に変わり見る見る疑惑の表情に変わる。

「ちょっと・・・それって・・・」

「ああ、持つてつた。」

「も、持つていたつて・・・あんた達ねえ・・・あれを手に入れる  
のに行きがどれほど苦労したと思ってるのよ！」

「何だよ。どうせ持つていくつもりだつたんだろう？・

「ちがう！あれはあれで大切なの！バカ！」

「バカは何だ！あれを俺が持つていってなきゃ今頃みんなで仲良く仏さんだぜ？！」

「サンダー・ボール使つちやつてどうするのよー返しなきよー。」

「そりゃ無理だわ。ありゃ使つたら無くなつちまつ。」

「解つてるわよ！だから・・・だから・・・」おの、バカモノオ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

レファが「カマラ」を手に入れてから3回目の収穫祭が終わった翌

日。

下町にある酒場の一角。

「あんだと、この分からず屋！」

「分からず屋はそつちでしょ！イイ？よく考えなさいよ。」

「よく考えても一緒だ。サンダー・ボール取りにそんな所まで行ってたら2ヶ月はかかるぜ？」

「元はと言えば誰のせいだと思つてゐるのよ！」

「あんたがあんなモン取りに行くなんて言い出さなきゃ良かつただけの話だろうが。」

「ちょ、ちょっと・・・2人ともさ、ね、ケンカやめようよ。おみくじや。」

酒場で未だに日常的に行われているような言い争い。

周りにいる客は全く聞こえないかのよつなそぶり。

店の店員もしかり・・・

「ね、ルーツの言つたことも解るけど、奥様の言つ」と聞かな  
くつちや。」

「その、奥様つてのがすぐ納得できねえ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5504d/>

---

～誓い～

2011年1月4日04時09分発行